



勉強法を知らない子供達⑧

●前回まで参考書の解説の実情について書いてきた。結論を言えば、無意識に正しい考え方ができて、学力をつけた人が著すので、一定の力を持つ生徒にしか実は通じないということである。英語についていえば、更に、英作文のやり方、長文の解き方、発音アクセントのやり方、リスニングの対策など、まだまだあるのだが、こうしたことは、また別の機会に回すことにする。そこで、今回はテストの点が伸びない原因について。

●模擬試験、入試をうけるにあたって、親も教師も様々なアドバイスをします。そして、それは、内容としては的はずれではないものの、大半の生徒には無駄である。親でも教師でも成績がよかった人は、無意識にクリアできていた様々な前提条件に対して無知である場合が多い。以下、数十年にわたって生徒から集めた材料を使って分析をしていこう。分かりやすくするためには生徒が打ち明ける悩みとそれに対する回答、私のコメントをいう形をとる。

●(1)生徒「時間が足りません。いつも大問が一つ残ります。」

回答「時間配分に気をつけろ。できる問題から解くんのだ。」

コメント正しい。でも不毛である。時間が何故足りないのかの分析がなされていないので役に立たない。時間が足りないには必ず次のような原因がある。①学力不足。英語についてい

と、単語力を始め、文法、熟語、訳す力など足りない。すべて「カン」で解答题紙を埋めるのなら別だが、ちゃんと考えて解くなら、時間が足りるはずがない。②文章をちゃんと読めない。(これも非常に複雑な話になるのだが、一つだけにしぼると、英文を一生懸命頭の中で音読している人もそうだ。「読む」ということは、実はどの本にも書いてなくて、従って、親や教師も「読む」ことをきちんと示さない。「読む」とは、意味をとることで、そのためには「訳す」しかないのだが、それをできない生徒がびっくりする程多い。成績のよかった人は、無意識のうちに「意味をとる＝訳す」という作業ができた人達で、まさか生徒がひたすら英文を頭の中で音読しているの意味をすっかりとれていないなどとは想像もできないのだ。「英語を英語のまま理解する」のは最終的な目標となるが、それができる人も、英文を読むとき音読などしていないはずだ。これは、国語の現代文と比較して考えれば分かりやすい。論説文を読むとき音読をしていたら、その抽象的な内容はなかなか頭に入っていない。文章の内容をつかむということに集中するためには頭の中で音読するという行為が大きな障害となるのだ。勿論、練習としての音読は非常に重要だ。英語でも古文でも、また現代文が苦手な人は音読をすべき。



それは、言葉のリズム、意味のかたまりなどに對する感覚を身につけるために欠かせない。そして、音読がスラスラできるということは、文章を読むとき、音が気にならないので意味をとることに専念できるという副産物をもたらす。③考えていない。でも本人達は一生懸命考えているつもり。だけど、実態は、分からない問題

をみつめて「①かな②かな?やっぱ③のよう な気もするし...。」とただ迷っているだけ。これは疲れるし、時間もかかってしまう。成績の良い人は「分からない。とりあえず②にして次の問題に行こう」と反応できる。満点なんかとれないのだし、合格点をとるには、これこそが正しいやり方。成績のよい人は考えるべき問題としっかり向きあうので、従って点数もよくなるのだ。ただし、学力不足の人は、まずそこをしっかりと補強するしかない。因みに京都大学の二次試験のボーダーは四五%ぐらい。だから、受験生は五五%から六〇%を目標として設定する。はなから四〇%分は、できなくてもよいという構え。これこそが合格点をとる秘けつだ。

●(2)生徒「試験のとき、頭が真っ白になってしまいます。」

回答「落ち着け。落ち着いてやればきみは大丈夫。」

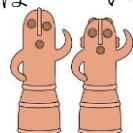
コメントある意味正しい。やはり不毛。落ち着けないから頭が真っ白になるのであって、論理的にもおかしい。「落ち着く」のは目標であって、「真っ白から落ち着いた状態に至るまでの過程」が必要なのだが、これに触れる人はほとんどいない。受験学年になると、模試の回数も増え、入試だって何校も受けるのだが、その度に、結局落ち着けなくて力を出せない生徒は多い。

因みに、これまで書いてきた内容も含めて「落ち着く」ためにどうするかをきちんと書いてある本は、ほとんどない。これもやはり、勝ち組の人が自分の経験から多少の類推を入れて著しているし、発言しているからであろう。また、教える立場になった人は、かつて自分が「真っ白」タイプであったとしても、完全にそれを忘

れていることが多い。では、どうするのか?①落ち着こうとしないことが大事。落ち着こうとしたら真っ白になりかけている自分と、落ち着こうとする自分が心の中で闘いを始めてしまう。当然、問題にきちんと向かうことなどできない。(以下、次号) (小林)

社会を好きになっただきっかけ

生徒に社会は好きかと尋ねると、大抵は「嫌い」または、「嫌いじゃないけど好きでもない」と返ってくる。そこでさらに、なぜ嫌いなのかと聞いてみる。すると、多くが「覚えるのが苦手」、「ただ暗記していて、つまらないから」と答える。確かに、社会という教科は暗記科目であるから、他教科に比べて覚える用語は多い。また、歴史では今現在の話ではなく、過去の話をしていくため、話を聞いていてもイメージが湧かず、面白くないだろう。



実際、私も小・中学生の頃は、あまり社会は好きではなかった。特に歴史の授業では、先生の話の聞いていても、いまいち、ピンとこず、先生が楽しそうに話をしていくのを、ただ眺めているだけだった。だから、生徒たちの言っていることはすぐわかる。また、私自身、暗記は苦手だったので、より共感できる。しかし、高校で変化が訪れた。今まで興味なかった歴史が少し楽しくなってきたのである。そのきっかけは、小学生のころ、親と行ったある寺が(寺の名前は忘れてしまったが)、授業で紹介されたことである。その瞬間、私の心の中で、家族四人でいったあの寺の思い出が蘇った。たしか、あの日は、暑い夏だった。父と手

を繋ぎながらくぐった中門。妹とかけっこして、母に怒られた回廊。そして、帰りに父の趣味だった御朱印をもらい、書かれた字があまりにきれいでひとりで感動したこと。私の心は、懐かしさで一杯になり、ものすごくほっこりしたのを覚えている。同時に、授業の中で、先生からその寺がどのような経緯で建てられたのか教わったとき、今まで点でしかなかった知識が線で結ばれたような感覚を味わった。まさに歴史を学ぶ楽しさを実感した瞬間である。それから私は、授業だけではなく、自ら歴史について学ぶようになり、様々な知識が身についた。そして、身についた知識と知識が、さらに線で結ばれ、様々な気づきが生まれた。だから、学ぶこと(歴史に限っていたが)が大変面白くなり、明け方まで勉強していたときもあった。その結果、定期テストでは毎回成績上位者に名前が載り続けるようになった。周りからも、歴史に限ってだが一目置かれるようになり、自信もついた。社会は、暗記要素の強い科目である。しかし、ただ覚えるのでは膨大な量があつて、大変なだけである。だからこそ、色んな知識と関連させて、つながりを持たせて覚えると、丸暗記するより楽しく覚えられるはずだ。私の小学生の思い出と、高校での授業がつながったように。そして、そのつながりから新しい発見が見つかり、社会を学ぶことが楽しく感じられ、少しずつ社会という科目に興味を持つことができるのではないだろうか。

(矢上)

父の日

六月の第三日曜日。すでに始まっていた母の

日にならない、父にも感謝すべきということから始まった父の日。今日では、毎日が何かしらの記念日になっているが、日頃お世話になっている父親に対し、感謝の気持ちを忘れないためにもこのような記念日は必要だろう。しかし、私には感謝を伝える父はもういない。

「いつまでもあると思うな親と金」とよく言われるが、私にとってもその言葉は例外ではなかった。

今から約三年前。父は血圧が高く薬を常用していたものの、大病にはかかったことがなかった。しかし、風邪をこじらせ一向に良くならない日が続いた。心配した母が救急車を呼び病院に運ばれたが、そこで下された診断は髄膜炎だった。命の危険もあるほどの重症だった。何とかこそは助かったものの、脳は多くの損傷を受け半身不随になってしまった。子供の頃の父は山のように大きく象のように太い手足をしていたが、ベッドの上で横になっている父はすっかり小さくなってしまい、手足も細くなっていた。

喉にはたんをとるための穴があけられた。以降父が亡くなるまでその声を再び聴くことはなかった。もともとそれほど口数の多い父ではなく、帰省したときもあまり会話を交わすことがなかった。まだまだ父は元気。いつでも会話ぐらいできると思っていた。だから、父との会話がこういう形で終わるとは夢にも思わなかった。私の父は自営で農機具の販売・修理を仕事としていた。どこに行くにも作業服を着ていき、手の爪のところに機械の油が入り込みいつも黒かった。仕事の合間をぬっては、授業参観や運動会といった学校行事にも顔を出してくれた。

どこで知ったのか部活の大会にも顔を出してくれたこともあった。人がたくさんいても作業服の父はすぐに分かった。こちらが気付くと、にこっと優しく微笑む父だった。

休みの日は大好きな歴史の本を赤の色鉛筆片手に読んでいた。またお祭りが大好きで、お囃子を演奏するのが好きだった。祭りが近づくとき、三人全員を大学にまでいかせてくれた。後で知ったことだが、そのため貯金はほとんどなくなってしまうというのだ。自分たちの老後の蓄えなど考えもせず、与えることしか考えなかった。そういう家計にありながらも、「子供にお金の心配はさせない」と一言も口には出さな



い父だった。書き出せば父との思い出は尽きない。そんな父に親孝行できるようになったのは最近になってからで、こんな息子で父は幸せだったのだろうかと思ってしまう。

父の死から約二年。気持ちも落ち着き、この機会に父への気持ちの整理にとペンをとったが書いているうちにいろいろな思い出が次々とよみがえり涙があふれてきてしまう。

梅雨が明ければ夏が、父の大好きだったお祭りの季節がやってくる。

(小池)

公立高校合同説明会 2019 2019年7月6日(土) 16:00~21:00(予定)

<東葛飾地区> 柏の葉カンファレンスセンター

千葉県学習塾協同組合では下記の公立高校の先生をお招きして、中学3年生及びその保護者の皆様を対象とした説明会を行い、各高校の特色や入試情報を許される範囲内で開示していただくことになりました。それぞれの高校の先生に全体会場にて説明を行っていただきます。生徒・保護者様ともに入場無料ですので、ぜひお越しください。

*入退場は自由です。ただし、説明途中での退場はご遠慮ください。

参加予定校	東葛飾高校	県立柏高校	鎌ヶ谷高校
	柏中央高校	柏の葉高校	県立松戸高校
	我孫子高校	野田中央高校	市立松戸高校
	小金高校	柏南高校	市立柏高校
	松戸国際高校	松戸六実高校	柏陵高校
	流山おおたかの森高校		
	※スケジュールは追ってご連絡します。		

